

以上の他分布図には文献から次のものを記録した。

var. *flaxicaulis*. Taiwan : Kaoshung hsien, Wutai 霧台, Hualien hsien, Mukuashan 大瓜山 (Li et al., Fl. Taiwan 4 : 652, 1978).

var. *tashiroi*. S. Kyushu ; Is. Kikaigashima and Is, Takarajima (Hatusima, Fl. Kagoshima, ed. 2 : 153, 1986).

(東京大学理学部附属植物園)

日本のクロマメノキには2変種がある (山崎 敬)

Takasi YAMAZAKI : Two Varieties of *Vaccinium uliginosum* L. found in Japan

日本のクロマメノキは樹形や葉形に変化が多く分類の難しい種類とされている。よく調べてみるとこの中には花序にふたつの型がある。この種は前年の枝先にできた芽が開いて花がでてくるが、ひとつは2-3cmの枝が伸びてその先に着く若葉または大きな包葉のわきに1個ずつの花が着き、全体で2ないし3個程の花をもつ若枝ができる(図1-a)。もうひとつは枝が伸びず、芽から直接に1-2個の花がでる(図1-b)。若枝の伸びる型は本州の2000m(浅間山ではより上部まで)以下の低地に成育するものに見られる。若枝の伸びない型は大体2000m以上の高山に成育していて、ヒメクロマメノキと呼ばれているものに相当する。この種の葉は変異が大きく、原寛氏は浅間山の色々な葉型の写真を載せて、クロマメノキとヒメクロマメノキとの区別が明瞭でないことを述べているが(本誌 28 : 83 1953)、浅間山のものは葉の大小に関係なく若枝の伸びる型である。北海道のもの

のは大体葉が小さいが、大きいものでも若枝は伸びない型のようなものである。

若枝が伸びるかどうかは程度の問題だけれども、日本には明らかに分布域を異にする2型が存在する。清水建美氏は日本のものは若枝が伸びるので変種として扱うのがよいのではないかと述べているがそれに賛成である(原色新日本高山植物図鑑 I : 153, 1982)。ただ同氏は日本のものが総て若枝が伸びるように書かれているが、高山性のものは伸長しない。日本のクロマメノキがヨーロッパのものとは異なることは前から知られていて、原氏によるとヨーロッパのものは果実が苦くて食用にならないという。日本とアメリカのものは美味である。日本ではアサマブドウと呼んで利用もしている。本州の低地性のものは若枝の伸びる点でヨーロッパのものとも異なるので日本固有の変種として区別したい。原氏によるとこれは $2n = 72$ で6倍体であるという。ヨーロッパのものは $2n =$



Fig. 1. Inflorescences of *Vaccinium uliginosum* L. a. Var. *japonicum* Yamazaki (Mt. Asama, central Honshu). b. Var. *alpinum* Bigelow (Mt. Daisetsu, Hokkaido). $\times 1.5$

48 で4倍体である。若枝の伸びない型のものは北アメリカから記録され、カナダ、アラスカ、カムチャツカ、東シベリア、千島、樺太に分布する var. *alpinum* Bigelow に相当すると考えられる。これは2倍体との報告があるから、日本のものもその可能性が高い。

Two varieties are recognized in *Vaccinium uliginosum* L. of Japan. The first is ascribed to var. *alpinum* Bigelow and distributed in Hokkaido and alpine regions in northern to central Honshu. The second occurs in high mountain regions of northern to central Honshu

and should be treated as a new variety.

Vaccinium uliginosum L. var. *japonicum* Yamazaki, var. nov.

Flores in axillis foliorum juvenium solitarii.

Typus. Pref. Nagano, Mt. Asama, Minenochiyaya (Ohwi et Okamoto, Jul. 17, 1958, no. 1793, TI).

Distr. Japan: C. to N. Honshu.

This variety differs from the typical form by the 2–3 flowers forming a leafy short raceme on a current year's shoot.

(東京大学理学部附属植物園)

□眞砂久哉さんと紀州のナチュラリストたち Hisaya Manago (1930–1989) and Some Naturalists of Kii Peninsula, Central Japan

眞砂久哉 (まなごひさや) さんの生涯——眞砂さんの家は江戸時代から木炭、特に備長炭 (びんちょうずみ) を扱っていた。備長炭はウバメガシを材料とした紀州特産の良質の木炭で、元禄年間に田辺の人、備長屋長右衛門の創製したものといわれている。備長炭は蒲焼、焼肉料理に適し、眞砂商店ではこれを主として東京に出荷していた。眞砂商店は田辺市新庄町にあり、屋号は今久 (いまきゅう) という。今出屋の久助が主家から別れたからである。家をつぐ長男の名には久の一字を加えるので、久哉さんの父上の名は久一 (きゅういち) である。昭和30年代になると灯油やプロパンガスが木炭にとって代る時代となり、彼の家も林業を主体とせざるを得なくなった。久一氏が岐阜県高山市の営林署に勤務していたとき、久哉さんは生れた。

久哉さんは昭和22年県立田辺中学校を卒業し、同年京都の同志社大学予科に入学、大学は文学部で心理学を学び、27年3月卒業とともに家業をつぐため、東京深川の木炭問屋へ奉公した。2年後に帰宅して家業をつぎ、30年4月、京都大学農学部林学科大学院の聴講生となり、同年山本あけみさんと結婚し、京都で家庭を持ったが、31年3月田辺の家に帰った。昭和45年のはじめ、今の中屋敷町に新築して移った。長男の久晃さん

は英文学者、次男の俊哉さんは西牟婁郡県事務所林務課に勤め、家をついでおられる。

久哉さんは紀州の林業に力を入れ、紀州林業懇話会事務局長をはじめ、国や県の林業団体、地元林業組合などでいろいろの役職について活躍した。その一方、田辺市の文化事業に尽くし、田辺市文化財審議委員、田辺市史編纂委員、田辺市立図書館協議会委員などをつとめた。そして誰からも愛された。同志社ではグリークラブで唱っていたが、田辺の音楽界にも力を入れた。多屋平夫氏が「自然を大切にすると」を結成すると、すぐその活動に賛同して中小屋谷の原始林を歩き、「熊野古道を歩く会」では世話役となり、歩けなくなった会員を背負って山を下ったこともあった。

和歌山県は山が深く、南国でもあるので、そこに豊富なシダ植物に彼の興味は集中し、県の南部の山や谷はすべて彼の足跡を印するところとなった。日本シダの会の会員だったが、1975年には6名の発起人で「紀州シダの会」を創立し、6月末には入会希望者が26名に達し、翌年の2月7日に新宮市で発会、眞砂さんは会長として毎月のように会員と共に熱心に各地に採集した。シダの種の判定に疑問があると、京都の田川基二氏 (1908–1977) や東京の倉田悟氏 (1922–1978) 等に質問し、両氏亡きあとには大阪の瀬戸剛氏、東京の中池敏之氏に同定をたのんでいた。材料を提供してシダ学者の研究も助けた。

眞砂さんの採集した標本は16000点を超え、そ